



Wydarzenie z okazji 100. rocznicy nawiązania stosunków dyplomatycznych między Japonią i Polską

Opera
„Zapomniani chłopcy -
wysłannicy Ery Tensho do Europy”

Kompozytor : Minao Shibata Skrypt : Edward Ishita

オペラ
志から少年
天正遣欧少年使節

ニエボカラノフ ★★ ワルシャワ

オシフィエンテム ★★ クラクフ

2019 年ポーランド巡演 記念文集



今回のポーランド巡演。

公演に至った経緯を簡単にお話します。



- 1、まず、今年がポーランドとの国交樹立 100 周年だったこと。
- 2、お世話になっている夢ノ社の白浜さんがポーランドといろいろな繋がりがあり、キリシタン文化伝承プロジェクトの一環でやりましょう、と賛同くださったこと。
- 3、1992 年にポーランド人でもある故ヨハネ・パウロ二世にこのオペラの一部をお聞かせした時、「このオペラで世界平和のために頑張ってください」と仰って下さったこと。その彼がコルベ神父を列聖されたのです。コルベ神父が長崎で当時発行された「聖母の騎士」という雑誌が現在も発行されていることをご存知でしょうか？
- 4、そしてそのヨハネ・パウロ二世を列聖したのが一昨年バチカンでお会いできた、現法王フランシスコ様だったわけです。
- 5、ポーランド大使館広報文化センターに相談に行ってお協力いただけることを確認したこと。（当時の所長がブワシチャックさんと、彼が帰国され日本との文化交流事業を継続されていたので、今回は彼にいろいろお手伝いして頂きました。）

そのようなことが重なり、ポーランド巡演することを決め、あらゆる助成団体に支援を求めましたが、結果的に何とどこも応じてくれませんでした。しかし、途中で止めることは出来ず、皆さんのお力でクラウドファンディングを達成して頂いたり、借金したり、私の伝手でいくらご支援や助成金を頂き、皆様のご理解とご協力があった初めて実現できました。

さて、公演回数が今回で 150 回くらいになったのでしょうか。他の団体も何回か取り組んでいただいたようですが、回数だけ思っても「これだけやってきたんだなあー」という感慨が湧き起こってきます。

といっても、西欧の有名なオペラやミュージカルの公演回数とは比較にならないでしょうが、私にとってはこれまでの一回一回の公演がすべて懐かしいものであり、その時の様子をくっきりと思い出されるものばかりなので、特別なものです。

9月15日。今回の最初の公演地ニエポカラノフ。前述したように聖コルベ神父が雑誌「聖母の騎士」を発行され活躍されたところで、ナチスに逮捕されたところでもあります。ファーザー・ミロスワフやテレサさんのご協力で実現しました。ちょうど修道院に泊りに来ていた子供たちとの交流や、終演後の打ち上げでの彼らの表情や言葉が忘れられません。

次のワルシャワでは、もともとワルシャワの国立室内歌劇場で9月18日に公演する予定だったのですが、突然改修工事が公演日に間に合わないと連絡があり、急遽、友人の松浦悟郎名古屋司教に相談し、日本にいらっしゃるポーランド人のシスター・ヨルダナさんを紹介していただきました。そして彼女からドメニコ会の日本語がお出来になるフォーリーズ神父を紹介して頂いたおかげで、この教会での17日の公演が実現しました。終演後、修道院長が感激なさりながら、言葉よりも芸術の力です、と仰ってくださったお言葉が印象に残りました。

それから夢ノ社の白浜さんが別途、聖十字架教会にあたってくださり、ココでも連日の18日に公演することになってしまいました。ショパンの心臓が安置されていることで世界的に有名な教会ですが、まさかここで公演することになるとは私も思っていませんでした。ここでも総立ちの拍手。終演後の主任司祭の度重なる抱擁やお言葉、そして頂いた大きな見事な書物。お客様の感動とともに私たちも嬉しかったですね。

そしていよいよ、クラクフの国立歌劇場公演。19日にはまずレセプションで前祝をして頂きましたが、聖十字架教会に続いて小松電器産業の小松社長御一行がおいで下さりました。

ココでの公演には国立歌劇場管弦楽団、シロンスク舞踊団、指揮者ジークムントなどの共演。経済的には相当な負担がありましたが、それを乗り越えて素晴らしい交流公演が出来ました。

特にシロンスク舞踊団の出演は楽しかったですね。そして、この国立歌劇場でも総立ちの拍手。この国立劇場でスタンディングオーベーションは珍しいとのこと。国立劇場では不似合いと反対もあったのですがここでも私は、「シュワジベチカ（森へ行きましょう）」や「ストラト」というポーランドで一番有名なお祝いの歌を客席とともに歌うよう仕向けてしまいました。私が強引でよかった。？？

また、マイクを使わないとだめだと、指揮者や、時ゆく者役のポーランド人歌手から要求されましたが、断り続け、生声だけでやり切りました。結果的に会場と一体感の総立ちの拍手。これでよかったのではないのでしょうか。

最後は、オシフィエンチムに。21日はシスター・メディアトリクスさんの神通力でアウシュヴィッツ特別無料見学。事前の申し込みと案内役がいないと入れないと言われたのですが、彼女は、「いいことをするなら必ず道は開かれる」と信じて行動するものですから怖いものなし。結果、無料で入れて頂き、ガイドさんにも急遽お願いできました。マザーテレサを想起しますね。

とにかく、地下の餓死牢などを見学した後の皆の顔もどこか引き締まったものを感じました。今後どんなオペラ活動をしたらいいか、と何か感じてくれていたのでしょうか？

このアウシュヴィッツがあるオシフィエンチムという町の殉教者教会で公演したわけですが、終演後に歌うことが恒例になってしまった（シテシマツク）シュワジヴェチユカを、今回はブワシチャックさんのお勧めでまず、日本語で歌い、続いてポーランド語で歌いました。

とにかく、ココでもスタンディングオーベーションはもちろん、マリウシュ主任司祭の何とも表現のしようのないほどの喜びを受け取り、私たちもその感動を共に出来ました。

ニエポカラノフ公演後、総立ちのお客さまへ感謝の言葉を。



こう書いてくると、すべてよかった、素晴らしかった、で反って表面的な感動に聞こえるかも知れませんが、後は近いうちに出来るビデオなどで確認していただくしかないでしょうね。

ポーランドの5回の公演は、出演者の気合が漲っていてお客様と一体となったあの感動を呼んだのでしょう。少年使節、大人の使節、秀吉、ときゆく者、見事でした。そして脇役で活躍してくれた皆さん、頑張ってくれたね。一人ずつにお礼とアドバイスを申し上げたいところですが、今ここではお許してください。何しろ、各地からのベテラン、初心者がポーランドで初めて一堂に会したのですから、それはいろいろな試練があったことでしょう。

練習を重ねる中で、先輩は後輩を導き、後輩は先輩を見習って、助け合っただんだんいいチームに作り上げてゆく。それが出来てくるのが楽しみでした。

しかし、出演者だけではありません。陰で誰がどこでどんなに苦心されてここまで来れたか、すべて分かっている私はお礼の気持ちを簡単に言葉にはしたくありません。想像できる人はしてみてください。

他にも時間のない中、大急ぎで見事な映像を作ってくれた人や、舞台づくりをしながら出演するハードな役割に徹してくれた人。台本の翻訳から字幕スーパーを映し出して下さり、通訳までしてくれたマグダレーナさんには感謝だけです。

枝ちゃんが話したように、参加したすべての人の誰一人抜けても今回の成功はなかったのです。

マリウシュ神父がセットしてくださったオシフィエンチムの最後の打ち上げで申し上げたお礼の一言、もういちど言わせてください。

アリガトウ。



では、皆さん！

今回の巡演で『よかった』と思われたら、それをお返ししませんか？

誰に？どのように？

それは一人一人が決めること、忘れられた少年はきっと今も、貴方の心の中に息づいているでしょうから。

24日に帰国。中心メンバーが本番直前に10日以上も不在だったわけですが、

何しろ29日にはすぐに調布教会公演。

練習不足や準備不足が散見され、お客様の反応が心配でしたが、あの通りの大拍手が返ってきましたね。そんな中、蔵田雅之の秀吉、枝川一也の原マルチノ、ときゆく者の石多加代子の出来は秀逸でした、脱帽です。少年ミゲルで燃えてくれた名越桃子にも感謝しています。

急遽、指揮をお願いした野口剛夫氏にも感謝申し上げます。このオペラの内容に食らいついてくださり、理解を深めてくださるのが嬉しかったです。

問題の私。ポーランドで完全燃焼してしまい、燃えカスのようになっていました。帰国後不眠で風邪迄——。代役がいるわけでもなく、大変なことになってしまったと内心相当焦っていました。今までも何度か「今日は歌えるか？」と危機感

を覚えたことはありましたが、今回は半分実現してしまったようなものでした。

殉教に向かうジュリアンになりきって、会場の全ての人々に、彼の最後の思いを訴えよう、と死力を尽くして歌い上げる大変な役です。普段の三分の一くらいしか声が出せなかったように思います。会場でもお詫びしましたが、皆さんにもご心配をかけ済まない気持ちでいっぱいです。

僕は内心（ここに書いてしまってるけど）怖い。ジュリアンを裏切れないという責任感と、自分の体とのバランスが限界に来てるのが自分で一番感じている――。

僕の代わりにジュリアンが出来るとしたら誰が？と出演者に問いかけても「エドワード先生しかいませんよ、他の人には絶対無理ですよ。」と答えが今までは一般的でした――。

しかし、もう誤魔化せません。では、誰がこの役を？

回復の奇跡はまた起こるでしょうか？

以下はおまけに、以前エドワードエッセイ集に書きかけた文章が見つかったので手直して付加します。

《オペラ「忘れられた少年」が生まれた頃》

きっかけは、もう30年前になるだろうか、当会の「魔笛」公演で長崎県の大村市で公演した際、大村純忠顕彰40周年記念事業委員会の方々から、天正遣欧少年使節をオペラ化できないものかご相談があった。

僕も少年使節についてはあまり詳しくはなかったと思うが、話はどんどん進み、数千万円という大きな予算案も申請させていただいた。

そして大村純忠顕彰委員会の事業の最後の方に当会のオペラは位置づけられたが、しかし、イベントが多すぎる事が市議会からクレームが出て、イベントを縮小せざるを得なくなり、我々のオペラが犠牲になってしまった。

そんな苦難の船出だったが、台本作りは、やり甲斐があった。何しろ、帰国後の資料は乏しく、それだけに想像力を掻き立てられた。ヴァリニャーノの指示により使節たちの言葉をサンデが編纂したと言われる「九州三侯使節」。他に、浜田清陵先生、松田毅一先生、結城了悟先生の全ての関係書籍、ヨーゼフピタウ大司教から頂いたイタリア語の本、遠藤周作や松永吾一の小説、いったい何十冊の本とつき合っただろう？それぞれの観点が面白かった。

さて、天正使節から私は何を現代に投影したいか？4人の誰に焦点をあてるか？タイトルは、天正の光たち、と名付けかけたが、柴田先生の意見もあってやめた。あとで「忘れられた少年」というタイトルが思い浮かんだのだ。

その大切な作曲家を誰にするか？『日本から世界に発信できる、しかも国民的なオペラを。』と思っていた私は、日本の作曲家はいったいどんな歌を作っているのだろうと、現代音楽協会や作曲家協議会に協力していただき、現代日本作曲家の夕べというタイトルの三夜連続演奏会を開いた。その中で、柴田南雄の「雨にも負けず」という宮沢賢治の詩に作曲したものが面白かった。一言でいうと、作曲する上での自由な発想が面白く感じた。普通の歌曲のイメージを一新する曲だった。作曲の相談をしてみると、彼も天正少年使節には丁度興味を持っていらっしやった時で、どんどん一緒にやりましょう、という空気になり、お引き受けいただいた。

物語は何度も作り直したが、結局は主人公を置かず、ときゆく者を登揚させて、4人の心の中や生き様を掘り下げてゆく今の形が出来上がった。この形で本当によかったと思う。こうしてプロットが出来上がった頃、柴田先生と誰

かい詩人に言葉を整理してもらおうか、という話も出たが、いい人が見つからず、柴田先生の奥様にもご協力いただいて作り上げ、全音出版の楽譜にある通りの台本でいくことにした。

その後、ザビエルと忍室の論争を加えたりして、ザビエル版と呼ぶ現在の台本で公演するようになった。僕が生きている限り改訂される可能性が常につきまとい、出演関係者から笑い話によくされる。まだ僕が生きているのでゴメンナサイ、と言いながら――。

さて、初演の頃の思い出を。

柴田先生からFAXで送られてくる1曲、1曲が楽しみにしてならなかった。僕の台本は、4人それぞれの心中を情感たっぷりに描いて行くが、柴田先生の音楽は情緒に流されることを拒否するようなところがあって、面白いバランスが出来上がったように思う。僕の期待を微妙に裏切りながら、かえって効果的な音楽に仕上がっていったのではないだろうか？

知る人は知るとおり、「旅人」と最後のときゆく者が歌う「長い旅を終え」は、僕のオリジナル曲をもとに少し編曲された。オリジナルの方は、僕の他のオペラなどで生きているので御存知の方も多いただろう。2曲とも、柴田先生の音楽性と、僕のそれとが明快に区別され面白い。どちらも、とてもいい曲ではないだろうか――。

そう言えば、初演の頃、九州ではエドワードさんのを、東京では私(柴田)のを使ってはどうか、と仰っていた。心が広い、というかさっぱりして気持ちいい。

実は歌詞だけで行くと、「果てなき旅」「なせ」「去りゆきし返へ」も私のオリジナル曲があるが、それはメロディーラインがオペラには合わないの、完全に違う曲を作られた。

それから、伊東マンショのアリアは柴田先生から追加入れましょう、と申し出られていたのだが、そのまま世界されてしまい、僕が自分で作曲したのが今のアリアだ。

こうして、音楽界の最重鎮である柴田南雄氏と、現代のドン・キホーテを自認する僕との、ちょっと珍しいコンビのオペラが出来上がったわけだが、初演となる最初の九州巡演につき合った歌手たちとは、すんなりしっくりいったわけではなかった。

柴田先生とは芸術的なことに関しては考えがピッタリしていたが、音楽界に生きる柴田先生としては、歌手達の意見をもっと尊重してあげてほしいと思っていらっやっただろう。僕としては、こんな理解の浅い歌手達に媚びることはない、雇っているだけだ、とってしまったのも、今となっては僕も大人げなかったな、と反省している。ユニバーサルデザインの考え方を僕自身が体現できていなかった証拠でもあろう。

そして最終的に、出来てしまった大赤字も僕の責任と言うことで、2000万円くらいの負債を伊豆の合宿所を売って、やっと歌手たちに約束通りのキャラを支払った。

涙、涙、の話はこれくらいにして、このオペラの海外公演の楽しい思い出を少し紹介しましょう。

このオペラが出来上がったことが、毎日新聞に大きく報じられると、当時ポルトガル政府が大陸発見記念委員会を作って、国興しを計っていたのだが、その関係者が記事を見て当会のオペラを招きたいと申し出られたり、カトリック中央協議会がローマ法王に会える手続きをしましょうか、と申し出て下さったりで、日本万国博覧会記念基金などが支援をして下さり、イタリア、バチカン、ポルトガルなどで、欧州公演がスタートした。

欧州各地での公演は、初めは日本側だけでやっていたのだが、上演地の音楽家や民族舞踊団と組んで公演するこ

とが楽しくなってきた。

私が、例えばマドリッドに降りてレンタカーを借り、天正少年使節の足跡を辿って2500キロ位を走り、その地の市長さんや教会の主任司祭と交渉してまわる旅——。

当然、お金はないのでパンとチーズとワインで安宿に泊まり、宿主たちと楽しい会話の旅をした。

アウェイロという町で飲み屋に入ると、ドイツに出稼ぎに行っていたおじさんもいて、ドイツ語で話し、シューベルトを一緒に歌って騒ぎまくった。

コインブラではお金がなくてワインとチーズだけ買おうとすると、どうしてパンを買わないんだと、パンまで持たせてくれる店主もいた。

イタリアで、小高い丘の上で「オーソーシミーオ」を悪戯で歌ってみたら、見物人が集まってきたが、その中でスイスから来た客と懇意になりスイスに招かれているが、住所をどこにやってしまったか——、ゴメンナサイ。地方へ行くと英語が通じなくなることが多くなるが、覚えかけのポルトガル語やスペイン語で、何とか語り合うのも楽しかった。

スペインのサン・セバスティアンの劇場監督とアポイントが取れて訪問すると、僕の来訪を忘れていてどこか遠くに出かけてしまっていたときもあった。まさか、本当に来るとは思わなかったのかも知れない。その上、確かその飛行場だったと思うが、僕は不必要になったものを早く処分するのだが、航空券をもう要らない残券だろうとゴミ箱に棄ててしまい、翌朝、しまったと取りに行ったら、そのまま残っていて——。冷や汗！

そういえば、ポルトガルで日本人としてもっとも高名な、柔道家の小林清さんがいらっしゃる。歴代大統領ともお友達で、40年くらいポルトガルで、警察学校などで柔道を教えてこられたため、警官で彼を知らない人はいなくて、彼が高速道路を200キロのスピードで走って、警察に捕まったとき、おつきの人が「この方を誰だと心得る！？小林先生だぞ！」と言うと、「失礼いたしました、お許し下さい。」と謝ったそうだ。

この小林先生がいなかったら、今までの20回以上のポルトガル公演が実現したとは思えない。彼のことを、日本政府はもっと応援して欲しかったが、他界されてしまった。お礼らしいことができなかったのが辛い。

もう一人、エストリル音楽祭の監督ピネイロ・ナジー氏のことを忘れてはならない。ヨーロッパ音楽祭にも参加しているこの国際的な音楽祭に4度にわたって招待して下さった、貴重な理解者であり友人でもある。

でも、とにかく天正使節のことは、彼等が訪れたポルトガル各地の殆どの人が知らなかった。これが現実だ。

それから、チャップリンのお嬢さん、ジェラルディン・チャップリンと「アジアの瞳」という天正使節を題材とした映画で共演できたりしたことも思い出深い。特に僕の言うべき台詞について監督のジョアン・マリオ・グリロと意見が合わなかったとき、彼女が僕の言禁に感激してくれたことは印象に残っている。何と言いたかったかという、「人間の作る芸術は所詮不完全なもの、だからこそベストを尽くし続けるのだ」。しかし、長崎での撮影の時、僕は前日の日粋市公演から徹夜で撮影場所に着いたこともあって、台詞が思うように言えず、「後で取り直そう」が、いつかカットされたまま映画は封切られてしまった。それにしても映画の撮影は長くてイヤだね、と僕がつぶやくと、ジェラルディンも「これが映画、仕方ないのよ」と話し合ったことも懐かしい。

未だに僕は映画には抵抗がある。人間が監督の駒になりきり、観客は監督の狙ったとおりに、喜怒哀楽を感じさせられて行く——。ここには、見る側の自由な想像力は働きづらい。分かりやすいと言えばそれまでだが。

また前教皇ヨハネ・パウロⅡ世、前ポルトガル大統領ソアレスご夫妻に演奏を聞いて頂いたり、現ポルトガル大統領

領にもお会いできたり、スペインの首相にもお会いしたり、このオペラで世界のリーダーにお会いできたことは、やはりいいことだったろう。それがどのように僕の仕事と繋がって行くのかは分からないが、何らかの形で僕の中に生き続けることだろう。

ところで、長崎でオペラというと未だに「蝶々夫人」————。

長崎でオペラと言えば「忘れられた少年」、こうならないものか??

長崎の関係者に、天正少年使節をもっと大切にすれば、と話してはいるがどうなってゆくのか?

では、では、また————。

皆様方の永遠のしもべ 石多エドワード

エドワード監督 色々打ち合わせ記録

ドミニコ会の教会へ挨拶と視察



オペラクラクフの会場打ち合わせ



ニエボカラノフのマリア像



オペラの宣伝チラシを手渡したシスターは、偶然、ドミニコ会教会を紹介してくれたシスター・ヨルダナの知りあいでした。

聖十字架教会
白浜さんとブワシチャクさんも同行



マリウス神父にシュワジェベチカを
歌ったいただき発音の確認



お誕生日おめでとうございます！
手作りケーキのプレゼントです。

♪ クラウドファンディングに挑戦し、目標を達成することができました ♪

ポーランドと国交樹立 100 周年の今年、オペラの巡演で世界平和を！

支援総額	2,020,000 円
目標	2,000,000 円
支援者	66 人



ポーランド巡演を応援してくださった皆様へご報告

9月13日から24日までのポーランド巡演を無事終えて帰国いたしましたことをご報告いたします。クラウドファンディングを通して、「オペラで国際交流を」という我々の挑戦を応援してくださった皆様に、心よりお礼申し上げます。

7月12日、劇的にクラウドファンディングが成立したときは、皆さまと気持ちが一つになったと感じました。ハラハラドキドキもありましたが、ポーランド巡演のはずみになったと思います。

ご支援くださった方、ご心配おかけした方、協力してくださった方、皆さまにポーランド公演成功のうれしい報告をさせていただきます！

2019年は日本とポーランドの国交樹立100周年ということで、我々もオペラを通してポーランドの方々と交流する目的をもって巡演を行いました。

オペラ「忘れられた少年一天正遣欧少年使節」は、キリスト教を学ぶため初めて日本からヨーロッパへ派遣された少年たちの物語です。この内容をしっかり理解していただくため、舞台を見ながらポーランド語字幕を読んでもいただけるように工夫しました。

演出としても、ポーランドの民族舞踊団にマズルカでダンスしていただき、少年使節と一緒に踊る様子も演じていただきました。

これはクラクフの国立歌劇場、”オペラクラクフ”での一場面です。

ポーランドの若くて才能ある指揮者と、37名のオーケストラによる演奏もあり、とても贅沢な舞台になったと思います。



ポーランドの方との交流といっても、まず言葉は通じません。最初はどんな人たちだろうと緊張感があります。しかし、音楽で表現することやダンスすることは、言葉の意味が分からなくても通じ合えるものですね。挨拶と笑顔は大事ですが。

オーケストラもダンサーも、このオペラを何とか良くしよう、という気持ちを持ってくださり協力してくださったのです。本当にうれしかったです。

ポーランドで出会った方々は、女性はとても美しく、男性はとても親切です。ポーランドでの戦争の悲しい過去もあるのでありますが、どなたも穏やかで親切に接して下さいます。

また、このオペラを見に来てくださった方は、1幕と2幕を合わせて2時間半の間、飽きた様子も見せず、舞台も字幕もパンフレットもすべて真剣にご覧になります。寝ている人はいません。

最後は、会場の皆さんから立ち上がっての大拍手をいただきました。

オペラクラフでスタンディングオベーションは珍しい、と後で聞きました。ヤッタ！

公演後は必ず会場の皆さんと一緒に、「森へ行きましょう (Szła dziewczeczka)」と「100年を祝う歌 (sto lat)」をポーランド語で歌いました。

会場の皆さんも体を揺らして楽し気に歌って下さいます。

100年を祝う歌で締めくくれるなんて、とても良い選曲だったと思います。

皆さまからいただいたご支援金はすべて、オペラクラフの公演費用に使用させていただきました。本当にありがとうございました！



支出

- ①指揮者謝礼（編曲含む）；13万円
- ②オーケストラ37名；80万円
- ③会場費（2日間使用）；81万円
- ④技術スタッフ；39万円
- ⑤字幕、宣伝印刷物；34万円

*不足分については、会場収益や寄付金にて補てんしております。

我々はオペラクラフも含めて、10日間で5か所のオペラ公演をすることができました。

- ニエポカラノフ ボナヴェントゥラホール
- ワルシャワ フレタードミニカ教会
- ワルシャワ 聖十字架教会
- クラクフ オペラクラフ
- オシフィエンチム 聖マキシミリアン殉教者教区教会

クラクフ以外4か所はすべて教会でしたが、どの教会の神父様にも大変温かく迎えていただき、親切にしてくださいました。思い出しても心が温かくなります。

お客様にも沢山来ていただき、やはり真剣にご覧いただきました。

公演後は、「本当に感動した」「今日一日は頭を離れないと思う」「素晴らしかった」「天使の歌声」と感想を伝えてくださいました。さっきまで静かにご覧になっていた方が興奮して話しかけてこられるのです。



これはオシフィエンチムの聖マキシミアン殉教者教区教会の公演後です。

神父様は「この教会で日本のオペラをしてくださり嬉しい」とお話ししてくださいました。

これほど素敵な巡演になるとは思いませんでした。

クラウドファンディングの成功から始まったミラクルでしょうか？

オペラを海外で公演するのは、その国の協力者を探し、共演者を紹介していただき、会場や共演者とのコンタクトを密にとり、その国の習慣を知り、経済状態も知り・・・

本当に多くの下準備が必要です。

しかし、その過程で助けてくださり協力してくださる方に出会える喜びは、忘れられません。そこからその国への愛着がわき始めます。

知り合いを増やし、いろいろな考え方を知り、習慣を受け入れ、同じものを作る達成感を味わうことができ、最後に、「交流してよかった」と思います。

10日間の巡演によって、日本に愛着をもってくださったポーランド人、ポーランド人を好きになった日本人が増えたに違いない、と確信しています。

応援してくださった皆さまに、ポーランド参加者総勢38名、関係者より、厚くお礼申し上げます。ありがとうございました。

たくさんたくさんお世話になりました 😊

ありがとうございました！！

♡ 枝川親子 ♡

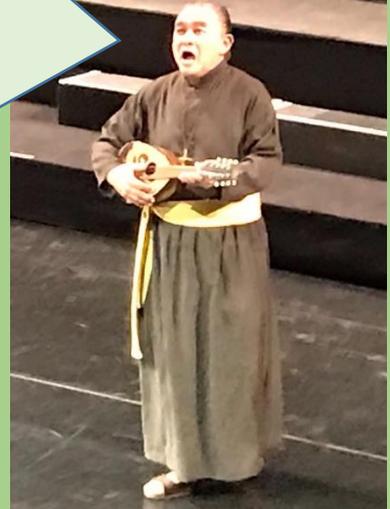


素晴らしい演奏ができて良かったですね！
特に、クラクフ歌劇場でのオーケストラは最高でした。そこに住んでいる人たちと共演することはとても意味深いものです。ヨーロッパで活躍することを夢見ていた若い頃を思い出しました。皆さんがいたからこそ実現できたことです。心から感謝しています。エドちゃん！次はどこに行くのですか？どこへでもついていきます。みんなも一緒に行こうね！森岡さんも忘れないで…。どんなことがあっても、きっと神様が助けてくれると思います！！ 皆さん本当にありがとう。
P.S. 娘共々大変お世話になりました。あんな子でよかったらいつでも貸し出しいたします！知識はないけど…力だけはありあまっていますので…。
また皆さんと共演できることを楽しみにしています。

枝川一也

皆さんありがとうございました！
ちなみになんですけど…二エポカラノフの公演が少年3公演目で…私、ここにいいのかな…ってずっと思っていました(笑)でも、皆さんに出会って一つの作品を創造できて本当に幸せでした！言語が違ってても想いを伝えることができる音楽って本当に素晴らしいですね♪父が人生をかけた音楽の世界を肌で感じる事ができ、娘も頑張らねば…と、気合が入りました！まさか父とカーテンコールで手をつなぎお辞儀する日が来るなんて夢にも思っていなかったので…ちょっと感動的でした！素晴らしい経験をさせていただき本当にありがとうございました。 P.S. 秦姉弟！お姉ちゃんのお相手してくれてありがとう ♡ 楽しかったよ！

枝川慧子



止まらない涙。アウシュビッツの収容所で、犠牲者の数え切れないほどの眼鏡や靴を見学。この惨事を実感し、自分は何ができるのか？どう生きるべきなのか？思わず自問する。そして、建物の外には、青空があり花が咲き、そよ風もある。きっと、惨事が行われていた頃とこの風景は変わらないはず。しかし、大きな違いは悲痛の顔に溢れていたことだ。その時、「忘れられた少年」の「陽はのぼり、陽は沈む、風は南にまた北に巡り巡る…」と歌が頭の中をずっと連呼してくる。「私が今できることは、他者の笑顔を見られるように私なりに他者に尽くし、生きることだ！」と思えた。エドワード先生の台本の意味はここにあったのかと痛感した。エドワード先生の天才ぶりに再敬礼した瞬間だった。

そして、今回の巡演の旅は、まさに、ポーランドのご協力者の方々、お客様、東京オペラ協会の仲間、東京オペラ協会の関係者の方々が笑顔で過ごす日々の連続であった。その裏には、皆さまが他者に尽くす想いの上に成り立っていることを悟った。この笑顔溢れる毎日を過ごさせていただいた皆様に感謝！

そして、その中で誕生日を迎えられた私は、どんな高価な贈り物をいただいた誕生日よりも最高の日だった。素敵な仲間、ポーランドの仲間へ感謝！そして、このすばらしい巡演を企画なさったオペラ協会の関係者の皆様、特に詳細のご手配をなさった大島さんに、感謝！

りりさんから、「ポーランドでのオペラデビューで、農民から始まり、きれいでころ、そして、調布公演では淀君。ずいぶん早くに出世なさった！」とのお言葉。えっ？では、次は卒業？

いえいえ、「舞台と乞食は三日やったらやめられない。」と、夫のお弟子さんが、以前おっしゃっていたことを思い出した。また、素敵な皆さまと一緒に舞台に立ちたい！

追伸 一番書きたかったのは個々の皆様との楽しいエピソード！エモーショナルで、充実したひと時！しかし、、、エピソードは、あまりにたくさんあり過ぎ、書き始めたら数十ページになるなあ〜と、書けなくて残念。





今回のコンサートは、段取りで演技をしたのではなく、気持ちで自然と身体が動き表現していた。それは、教会、観客、コルベ神父から貰ったエネルギーの賜物のように思う。437 年前に四少年がヨーロッパに船出した事が、今自分の身に起こっている用にさえ思えた。

禁教令。

約 200 年に及んだ鎖国。

第 1、2 次世界大戦。

コルベ神父が天に召されたのもわずか 78 年前のことである。

当時のナチスドイツ 軍人には、この様な勲章をあたえられ、大家族の母親には写真左下の勲章があたえられた。当時は、自分達のしている事を正義と信じて突き進んでいた。

広島、長崎の原爆は、74 年前。

この少年は、自分の兄弟を背負って、泣かないように歯を食いしばり火葬の番を待っている。撮影は、アメリカ兵だった。

戦争は 負の遺産しか残さない！

ポーランド公演を切っ掛けにもう一度、広島や長崎の原爆記念館、そして出島を見に行きたいと強く思った。

帰国後息子家族とディズニーランドに行った。今の日本の危うい平和が、1 日でも長く続くように祈らずにはいられなかった。

私の頭頂部が薄い髪型をザビエルハゲと言う。ありがたいことにコルベ神父の御利益で毛が生えてき始めたー～～！





島田 り里

中2の時、高槻の隠れキリシタンとの出会いで魂を揺さぶられ、卒論に「高山右近」を書くために、長崎、平戸、鹿児島の旅、現職時代の国際交流、退職後のオペラ。その延長線上に今回の「忘れられた少年」で、「キリシタンオペラで国際交流」をするのが私の生涯で約束されていたと感じる巡演の旅でした。このような機会を与えてくださった蔵田先生を始め、石多エドワード先生と東京オペラ協会の方々、また私たちを支えてくださった数々の団体の方に心から感謝いたします。

旅程をいただいたとき、なぜこの場所で公演をするのかと色々調べているうちに、「コルベ神父への巡演の旅」なんだと確信しました。修道院長になったニエブカラノフの修道院、神学校の教授になったクラクフ、「聖母の騎士」を発行して宣教活動を始めたワルシャワのテレシン村、そして殉教したオシフィエンチム(アウシュビッツ)。どこの地も観客の方もコルベ神父を胸に秘め、生きてこられたと感じました。クラクフ国立歌劇場では、オーケストラと舞踊団と共演でき、バックに素晴らしい映像がある中での公演で、感無量でした。どこの教会でもスタンディングオベーションで、中にはサインや写真撮影まで頼まれ、言葉がわからなくても、人の心を揺さぶる「音楽の力」を感じました。全国から集まった人たちで作上げたオペラ！初対面でも同じ目標に向かって芸術を作り上げていくパワーを感じました。そんな仲間に入れていただけたことは、生涯の財産になりました。

親日感情があり温かく迎えられたポーランド、自然に恵まれたポーランド、スープをはじめとする美味しいお料理。ショパンやキューリー夫人を生んだポーランド、そして過去の歴史を何年経っても意識して、前向きに生きて行く姿に共感しました。最後のアウシュビッツのそばのホテルに着いたとき、青々とした空に十字架の雲で迎えられたときは、私たちの巡演を歓迎して、雲の十字架をつけたコルベ神父が「ありがとうございます。」と空から語りかけているように感じ、思わず胸が熱くなりました。それはまさに「忘れられた少年」の音楽の幕開けでした。



この度、思い切ってポーランド巡演に参加して、本当に貴重な体験をすることができました。監督をはじめ先乗りしてくださった大島さん、ポーランドの通訳をしてくださったマグさん、シスター、東京オペラ協会、長崎、愛媛、各地からご参加のみなさまに大変お世話になり有難うございました。ニエポカラノフ：最初の公演をする前は、ポーランドのメンバーと一度も合わせて演奏していなかったので、かなり不安がありました。本番を何とか一度終えて、ようやく後の4回の公演を乗り越えられそう、と思いました。

ワルシャワ：ワルシャワについて少し観光する時間を取れました。ベルベデーレレストラン、ショパン博物館、旧市街等。そして、ドミニク教会での公演で初めて町の上を歌いました。かなり埃っぽい工事中の廊下で、喉の調子はあまりよくありませんでしたが、何とか乗り切りました。やはり本番は緊張しました。多くの観客の皆様からの温かい拍手は本当に有難かったです。

クラクフ：オーケストラ、指揮者との合わせがなかなか合わず、またシロンスクの舞踊団の美しさと、勝手の違う動きで、戸惑いながら本番までハラハラでした。それでも、本番は本格的な劇場で、オーケストラでの演奏は気合が入りました。クラクフに入ったあたりが一番疲れていたかと思いますが、お風呂があるホテルで一気に疲れが取れました。

オシフィエンチム：コルベ神父の像がある教会での最後の公演、ここでも町の上をやらせていただきました。最後にお客様がスタンディングオベーションで拍手をしていただき、本当に嬉しかったです。またホテルが一番豪華でした！！あっという間に全ての公演が終わってしまいました。



アルトの皆様

お疲れさまでした！

皆様、お世話になりました！

また、どこかで再会いたしましょう！





立木 厚子

昨年の合唱団の曲『マタイ受難曲』を初めて 教会で歌い 感動したのが 今 思えば 始まり…だったようです。そして今年の曲が『忘れられた少年』です。

ポーランドでの巡演演奏旅行、お誘いを頂いたときは 色々 日程調整等で迷いましたが 本当に今回 参加でき そしてオペラでの参加が私にとって 初めての貴重な体験でした。今 思うと 12 日間で あっという間だったようです。12 月の演奏会をポーランドでの舞台のイメージを大切に！歌いたいです。素晴らしい曲ですね。がんばります。

そして 皆さんとご一緒できたのはとても 嬉しく 楽しかったです。

皆さん！どうも ありがとう ございました。



山崎 純子

私が「忘れられた少年」の楽譜に出会ったのは 10 年以上も前のことです。波佐見の町まで聴きに言って以来、その火種は、常に胸底にあり…でした。

曲については、合唱団で練習していても、オペラとなると色々なことが要求されるので、未経験の自分に果たしてできるかどうか、不安は隠せませんでした。しかも、怪我をするという精神的にも肉体的にも負を背負って…。しかし、皆さんのオペラを追求する気迫と熱意に影響され、自分自身も高められていく気がしました。

また、ポーランドの方々の友好的な姿と、街の歴史、自然環境等など夢の中にいるようでした。特に、オシフィエンチムの捕虜収容所を見学し、殉教者教会で公演できたことは、今後の自分の生き方に持続する決意をもたらしました。

最後に、怪我に際しての皆さんからのご厚情、深く感謝しております。

同行した萩原恵美子さんも楽しく、意義深い旅だったと申しております。

ありがとうございました。



ポーランドの思い出

たのしかったなあ。

青い空。緑の木々。美しい街並み。

優しい人たち。

素晴らしい舞台。悲しい施設。

半年前のことなのにほんの半月前のように感じるのは私だけでしょうか。

いまだに、ポーランド関係には反応してしまいます。ポーラ・・・化粧品でした。ポー・・・ジュースか。公園を通った時ポーポー、見たら鳩でした。どうやらまだ身に染み付いているようです。

いろんな思い出のうちの一つが路線バスに乗ったときです。あんず会のメンバーで行きましたが、車内のチケット購入方法がわからず、役割分担をしました。信子さんが操作方法をポーランド人に聞く役目、私はそのポーランド人のベビーカーに乗った子供をあやす係、菅原さんがチケット販売機を操作する役。島田さんは急ブレーキで飛ぶ係、蔵田先生がそれを注意する部署。連携で見事に目的地まで行けた時は歓喜と安心感と残尿感で逝きそうになりましたが堪えました。やればできるもんです。

他に広田さんとコンビニに買い物をしに行き、言葉がわからず私が「ポケットク(翻訳機)」で、1.5 リットルの水ボトルを指差し「これより小さなボトルはありますか？」と聞いたり返ってきた言葉は、

「なんのために。」

広田さんと顔を見合わせた状態で三秒経過し、そのままそのコンビニを後にしました。なんと答えればよかったのだろう。「生きるため？・・・」未だに見つからないポーランドの禅問答でした。

たのしかったなあ。

青い空。緑の木々。美しい街並み。

優しい人たち。



ポーランド公演を終えて

いつも外国公演で思うことは、拍手が暖かいということです。
そして、今回は特にお客様が作品の中にドンドン入って来て下さるのを感じました。
たとえ、翻訳されたものを見ながらだとしても、私にこれだけの感性が有るだろうか？
不思議です。そして、そうなりたいと思います。

それから、何度も口にしましたが、舞踏団との4人の少年のコラボがとっても良かったです。少年たちの戸惑いと初々しさが出て可愛かった！

私は、というと 台詞を言い出すとお客様の目は、投影された台詞にくぎ付けで、誰一人私を見てくれず、こんなに寂しい、虚しい思いをしたのは、初めてでした。最後にドアの近くで、「いい声でしたよ」（英語でしたので多分）と言っていたので救われましたが……

又、千々石ミゲルの初舞台でも有りました。伴奏を付けての練習をほとんどやっておらず、オケ合わせで苦労しました。次、リベンジしたいと思っています。

昨年から体の変調をきたし、治療院に通っています。落とし物、忘れ物も数限りなく、渡航する1週間前に、パスポートがないのに気づき大騒ぎをしました。

ユニバーサルデザインオペラ。そろそろ私にもその恩恵が回ってくる頃かな？



石多 加代子

中牟田 峰子

10月に入ると九州でも澄みきった青空が見られるようになり、収容所見学の折に見たアウシュヴィッツの空の青さを度々思い出します。当時収容されていた人々がどんな思いであの青空を見上げていたのだろうかと考えたら胸が締め付けられるようです。生きる時代や場所が違って『陽は登り 陽は沈む 風は南に また北に 廻り廻る』ことを、改めて感じました。

二エポカラノフ修道院ではコルベ神父の生き様を、ワルシャワでは歴史に翻弄された人々の暮らしを、クラクフ国立歌劇場では人々の芸術への愛を、シロンスク舞踊団の舞踊とピアニストの奏でる旋律にポーランドの心を感じた実り多い旅となりました。この巡演の旅の実現に尽力して下さった方々に深く感謝いたします。





今回途中参加となり、雰囲気馴染めるか不安もありましたが、全国の見知った仲間たちの顔を見たらすぐに不安も消えました。今まで色々な公演で培った絆はやはり素晴らしいですね。

マンショの役は初だったので、色々自分なりに調べたり考えたりして役作りを行ってきました。まだ自分の中で方向は定まってはいませんが、今回出来る範囲内で精一杯演じれたと思います。

また機会があればマンショの役に挑戦できたらいいなと思いました。

今回の公演で思ったことは、何よりお客様やポーランドの方々がとても温かく接して下さったことだと思います。きっと言葉など通じなかったこともあったでしょうが、心が通じ合えたという感覚がありました。また機会があればもう一度行ってみたいです。またシスターに会って色々な話をしたいな。

これからも色々公演を続けていくにあたって、今回の公演を大きな経験値として、更なる向上できるように頑張っていきたいとおもいます。



ポーランド公演を終えて。

今回、ポーランド公演に夫婦 2 人で参加することになったのは、國元さんが最後の公演に出演できないので、一也くんに参加出来ないか？という話が来て、それなら 2 人で参加しようという事になりました。

ポーランドに 2 人で行くキッカケを作ってくださった（?!）國元さん、ありがとうございます。

しかし、2 人で後半から参加という事で、みんなとポーランドで合流出来るのか、**私は**とっても**心配**でした。特に心配だったのは、ワルシャワ空港からクラクフへの乗り継ぎ。入国審査をしてから 国内線に時間内にスムーズに行けるのか？それが出発前からとても心配で、心配で。私の心配をよそに、隣にいる人は なんだかお気楽で**楽しそう**でしたけど。

ワルシャワ・ショパン空港で特にショパンを感じることもなく、天気予報通り雨。クラクフ行きの飛行機はなぜかとても遅れて、乗り継ぎに間に合うか心配だったのに、今度はちゃんとクラクフへ飛ぶのか心配になりながら、ひたすら待ちました。なんとか無事にクラクフへ飛んで 空港で中牟田さんと蔵田さんに会った時はと～っても安心しました。あ～良かった！私の役目（一也くんをポーランドに連れてくる）は半分終わったかな♪みたいな。

その後は、空港から劇場へ直行してポーランドに来たーっ！とか、じっくり味合う暇も無く、ゲネ。「灯りをとむす」演出（聞いてないよ！）に戸惑いながら、まあ、やる事はどこの国に来て一緒、と思いつつ あっという間にゲネも終わりました。

オペラをやっている、と人に話すと凄いな～とか、海外に行くとオペラの公演、と言うととても驚かれますが、よく考えてみたらずっと同じオペラをやってるし、国が変わったからといって、特にやる事が変わるわけではなく、何十年も同じことをやっていたら 出来るようになるもの（**それなりに**）と、最近は答えます。

今回のポーランドで 1 番印象深かったのは、やはり「アウシュヴィッツ・ビルケナウ ナチス・ドイツの強制絶滅収容所（1940 年-1945 年）」を訪れたことです。

書物やネットなどで見て、知っている自分では思っていました、実際に訪れると全く違う、というか、こんなに辛く重く怖い場所だというのを全身で感じました。私たちが見学したのは ほんの一部にすぎないのに。何が怖いって、人間って本当に怖いなって思いました。

最後の焼却炉で、みんな言葉もなくその部屋を見学している時の 風が窓をカタンカタンと鳴らしていた音がとても辛く、ずっと耳に残っています。あの音が、わたしに何かを問うてるような、投げかけているような気がします。

涙を流して悲しむだけではなく、どうしたら 同じ過ちを繰り返さないか、2 度と起こさないために何が出来るか考えないといけないのですね。

楽しい場所では全然ないし、気持ちも重く辛いけど、伝えて行くのがアウシュヴィッツを訪れた人のすべき事かな、と思いました。

その日の夜、森ちゃんの部屋に集まり（年上の方にちゃん付け、ごめんなさい）、楽しくみなさんとお話して、私はもう少し賑やかな中に居たかったのですが、、部屋に戻って、帰りの荷造りを終えると、いつもは感じない静けさがとても怖く、森ちゃんたちの騒がしさも聞こえず（クラクフでは部屋が隣だったので、賑やかな声が聞こえていました）、部屋に戻ると速攻で寝た一也くん、普段は、「うーっ」と呻きながら寝る一也くんが、その日なぜか呻かず（**怖いっ!**）、電気を消すと真っ暗で、闇夜の静けさがとても怖くて、普段は点けない電気をつけて寝ました。

灯りのない闇がどれだけ怖いか、アウシュヴィッツを訪れなかったら、気づかなかったかもしれません。

国内で、もしかしたら海外で またみなさんにお会い出来ることを楽しみにしています。いろんな方に出会うことや、いろんな場所を訪れることが出来るのはオペラのおかげ、とつくづく思います。

これからも夫婦共々よろしくお願いします。

言葉になりません。
ここに何と書いて私の思いをお伝えしたら良いのか…

祈りの国での、祈りの巡演。
「この経験をさせていただいた私(達)には伝えてゆく仕事が課せられたと…」と、思いました。
奇跡の経験を、ありがとうございました。

山口陽子



慣れない舞台で三役も仰せつかり、正直なところどうなることかと思いました。一生懸命頑張りました。
夫婦で良い経験をさせていただき、ありがとうございました。

山口龍一郎

どの公演も、どこの公演も、どこの国の公演も、舞台の成功と安全を心から考えて舞台監督の仕事をしています。今回の巡演も、力一杯頑張りました。

廣田 修



5公演もさせていただきました。想像もつかないほど数々の準備をしてくださった方々に深く感謝いたします。おかげさまで今回のポーランド公演はサバイバル的経験もなく公演のことだけに集中することができました。どうもありがとうございました。

私は、初めて少年ジュリアン役をさせていただきました。あのような生きざまをした中浦



ジュリアンが少年だった頃、どんな気持ちで海を渡り学んできたのだろうと考えていました。自分の力に不安を持ちながらも与えられた使命を果たす責任を感じながら、未知の世界へのあこがれなどが、ないまぜになっていたのかなと。

劇中、『時ゆくもの』に「・・・中浦ジュリアン」と名前を紹介され舞台袖から出ていく場面があります。あの時「いよいよだ、こわい、やらなければ,,」という気持ちになります。ジュリアンが長崎から船出するときも似たような気持ちだったのではないかと思いつながら、私は走り出ていました。

さて、今回はたくさんのポーランドの方々とも共演することができ思い出に残ります。特にシロンスクの舞踊団の方々とのマズルカは楽しかったです。私と踊ってくださったカタジナさんが、私が間違えるだろう所を覚えてくださって、早めに合図をくださるようになりました。



た。 Dziękuję

ポーランドは、なんだかきちんとした国だなあという印象を持ちました。もう一度いけるかなあ。いきたいなあ。

原田 恭子



ポーランド巡演を終えて

兵藤好美

出発するときは、12日・・・なんて長いのだろうと思い、残していく家族や仕事のことなど 沢山の心配をしながら旅立ちました。でも、5回の公演も回数を重ねる度にみんなの一体感が感じられ、良いものになっていきました。公演の合間にはしっかり観光に奔走し、充実した12日間はあっという間でした。何より、長崎にいらしたというシスターのおかげでアウシュビッツを見学できて、とても感謝です。そして、全ての手配からお世話をしていただいた大島さん、加代子先生、ありがとうございました。それから、我々が監督。次回のためにも、体には気を付けて元気でいて下さい。私達愛媛メンバーは、これからも監督の健康管理に努めます！



蔵田信子夫人を真似して



ワルシャワ観光



ショパンコンサートを聴きに



楽しい仲間

ニエポカラノフで出会った
お友だち



オペラが好きで、ポーランド語の勉強も、オペラのために頑張りました。
行ってみると、ポーランドは思っていたよりもっといいところでした。みんな優しいし、スープもお菓子もおいしかったからです。
ニエポカラノフではポーランド語であいさつしたり、名前を聞いたり教えたりできました。最後の日にみんなが作ってくれたハートのカードをプレゼントしてもらってうれしかったです。
私は、ポーランドの人と友だちになって、仲良くなれたらいいと思っていたのでその願いごとが本当になって本当に夢みたいです。手紙を書いて、ずっと仲良くできたらいいなと思います。そして、5年生になったらまたポーランドに行きたいです。
(秦 美代子)



Dziękuję!

5回の公演を終えて、また「忘れられた少年」が好きになりました。ポーランドの方が熱心に見入ってくださったのもとても嬉しかったです。字幕から伝わるものも大きかったかもしれませんが、言葉の壁を越えて気持ちが届いたような気がしています。シロンスク舞踊団の方たちとの踊りもとても貴重な体験でした。

特別参加(?)の二人の子どもたちはこの旅をとても満足していましたが、何より皆様の助けがあってこそこのポーランド公演だったと思います。本当にありがとうございました。
子どもたちが積極的に公演の宣伝に出かけたり、Dzień dobry と挨拶したりする姿に成長を感じました。お友だち作りは子どもの方が上手ですね。見習わなくちゃ! いまだに片言のポーランド語が飛び交っている秦家です。

中身のぎっしり詰まったポーランド公演。アウシュビッツ資料館の見学はその中でも一番忘れられない思い出です。コルベ神父様やここに眠る人たちの気持ちはどんなだっただろうと思うと胸が張り裂けそうでした。今回の少年はそんな思いを抱きながらの公演になり、新たな気持ちで臨むことができました。

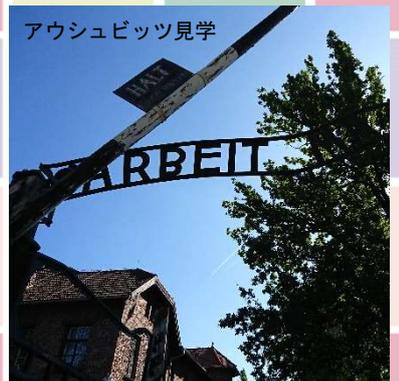
夜、北斗七星を見ると終演後に見たポーランドの北斗七星を思い出します。ポーランドは遠いなと思っていたけど、空はただひとつ。国境もなければ境界線も壁もない。人の心もそんな風にひとつにつながっていけばいいな、と願っています。
(秦美智世)



スクーターに乗っ



ポーランドの
どんぐり!



アウシュビッツ見学



どの飛行機に
乗るのかな。



お誕生日おめでとう!



あっちにも
行ってみようよ~

飛行機に乗れて楽しかったです。パンもおいしかったけどおやつが一番おいしかったです。
夕焼け小焼けの歌をがんばりました。神父様やシスターやお客様からご褒美にお菓子やぬいぐるみももらってうれしかったです。
ポニーの馬車に乗ったり、綿菓子を食べたりして楽しかったです。さとこちゃんとスクーターにまた乗りたいです。
(秦雄路)



ポーランド公演で、一番印象に残っていること、それは何と言ってもお客様の温かい拍手。続けて 5 公演もするのは初めてだったし、最初の二エポカラノフで燃え尽きて、あと 4 回も演るのー?!なんて思ったけど、ワルシャワに着けば、また公演に向けてのエネルギーが湧いてきました。ワルシャワでは公演前の休憩中に、翻訳と字幕操作をくださったマギーさんが「もっとポーランドの人たちにわかってもらいたい。とてもいいオペラだから。」と翻訳の追加と手直しをしてくれました。演じてる人だけじゃなく、みんなの熱い思いが込められた公演でした。

そして聖マリア教会のシスター。もう、本当にパワフルであたたかい！また一緒に歌いたいなあ。

それから、シロンスク舞踊団とのダンス。「いやー緊張したなあ。でも、みんないい人たちだね。そうだ、僕たちは素晴らしい国に来たんだ、ポーランドへ！」まさにこんな気持ちでした。一見難しそうな姿に見えるのですが、次々に変わる隊形移動や繰り返しのない動きに大苦戦。マルチノが踊った時もこんな気持ちだったかな？一緒に踊ったシロンスク舞踊団の女の子たちともお話ししたかったけど、、、せめてもっと英語がしゃべれたら。。。海外公演の後はいつも思うことですが。

このような経験は、したいと思ってもなかなか出来ることではなく、監督をはじめ、ポーランド公演へ関わってくださった皆さまに感謝いたします。ありがとうございました。アウシュビッツを見学して、人間はこんなにも残酷になれるのかと衝撃を受けました。国際交流とユニバーサルデザイン、どちらも世界平和につながる活動を少しでも沢山の人のために広げていければと改めて思いました。



東京オペラ協会の海外公演に初めて参加させていただきました。少し前まで「忘れられた少年」はタイトルしか知らなかった作品。通勤中に過去の上演 DVD を観たり、家事をしながら聴いたり、とりあえず頭に全体の概要を入れるところからのスタートでした。あまり細かいところは気にしないよく言えば前向き、悪く言えば楽観的な性格(作品が違いますが、ケセラセラ～なるようになる～♪)のため、楽しみながら取り組ませていただきました。(シロンスク舞踊団との踊りは不安しかなかったのですが…。)こんな私を皆さまサポートくださりありがとうございました。至らぬところばかりだったと思うのですが、どの本番もととても楽しく演じさせていただきました。

人が温かくて、ご飯が美味しくて、街もきれいで素敵な国ポーランド。でもきれいな部分だけでなく悲しい過去もしっかり心に刻んでこれからに反映させていかなければ。またいつか行けるといいな♪

高橋 祥子



ニエポカラノフ。最初だったので緊張。



ショパンベンチ。
キックボードを活用して
半分は廻れたかな。



移動中の風景。
日本で見られない景色。



いろんな所にどんぐりや木の実が。
日本より少し季節が早い。



でも向日葵も。

キックボードさん。ワルシャワでは
大変お世話になりました。



皆さま、本当にありがとうございました！



こんなに空は青いのに。
ここも決して忘れない。

ポーランド巡演

まずはポーランドってどんな国？と言うところからの出発でした。歴史も戦争のことも、何もかも無知な私ですが、ピアノを習っていた私は、ショパンがいた国...くらいしか解らずでした。

でも、前々回のポルトガルとドイツ公演も行かせて頂き、学生時代から海外演奏や旅行をして、「音楽は世界共通！」ということを感じ、その感動と楽しかった思いが蘇り、今回も是非行ってこようと決め、このポーランド演奏旅行も、本当に、素晴らしいものでした。

東京オペラ協会では2回目の参加ですが、ポーランド曲「森へ行きましょう」を用意していき、「皆で歌いましょう」と毎回の公演終演後には、なんとお客様も一緒に歌ってくださっていたのが、とても感動し嬉しかった事でした。

もちろん、オペラ「忘れられた少年」の作品を、ポーランドの方々は、何か感じ取って頂き、「日本にはこんなことがあったんだ。」という感想や内容にも興味を持って頂けたようで、何より日本にも興味を持ってくださってる方々がいるという事が凄いことだと思いました。

この作品に触れてから私は数年経ちますが、音楽の素晴らしさだけでなく、人間として生きることについても、お陰さまで、考えることができるようになってきました。

今回は5回公演、ワルシャワでの二つの教会、ニエポカラノフ修道院、アウシュビッツのあるオシフィエンチムの教会、クラクフでは、ステキな新歌劇場でのオーケストラとダンサーのコラボ公演もドキドキで、気持ちも身体も大変でしたが、本当に感動的な毎日が過ごせて幸せでした。

これを企画して下さったエドワード監督のかなりのお力あってこそその海外国際交流公演！本当に参加させて頂き、ありがとうございました。

今後は、自分は何をするのが良いのだろうか？私にできることは何だろうか？どうぞ宜しくお願い致します。

田村多佳子





平沼 多枝子

ポーランドに連れて行ってくださりありがとうございました。
それから、5回も公演ができて嬉しかったです。失敗もたくさんありましたが、
楽しい時を過ごすことができました。



ポーランドでお世話になった皆さま ご紹介！



大島 佳子

ポーランドツアーが、ニエポカラノフからスタート出来たことは本当に良かったと思います。初対面からずっと優しい言葉で安心させてくれる方たちでした。「大丈夫」「不安な事はない？」「お腹すいてない？何か食べない？」と、とても温かくて親切な皆さんにどんなに助けられたことか・・・

アンナマリア・ミックス、テレサ・ミハレフ、ヴィカー・ミロスワフ・コプチェフスキ神父



話すのもメールも日本語でした。本当に本当に優しく、急をお願いした会場提供も、最初から全く否定的な言葉を使わず協力していただきました。

フォリス神父



ワルシャワの聖十字架教会を初めて、日本人オペラ公演に貸して下さることを快諾していただきました。とても偉い方だと思いますが、何を頼んでも何でもやってくれました。

Zygmunt Robert Berdychowski 神父



ブワシチャックさんはポーランド公演を最初から最後までずっと支えてくださいました。とても繊細で緻密な性格で、とても勉強させていただきました。シスターメディアトリクスは、最初から「絶対うまく行くよ」と励ましてくれました。いただいたロザリオをずっと首にかけてその言葉を信じていました。オペラクラクフの公演後、「こんなにうまく行くななんて驚いた」と。半信半疑だったそうです。

シロンスク舞踊団団長さんは、とても紳士的。シロンスク舞踊団の共演に加えてマウシロンスクの参加を提案していただきました。



クラクフの manggha は日本の芸術を紹介するとてもオシャレなミュージアムです。

所長さんは、日本をとても愛してくれて今回のオペラツアーも応援していただきました。

Bogna Dziechciaruk-Maj 所長と職員の方



マウシロンスク団長

可愛い少年少女に、ダンスを熱心に体を使って指導されている姿が素敵でした。



ジークムントさん プロフィール

Ukończył z wyróżnieniem Akademię Muzyczną w Krakowie, gdzie otrzymał również tytuł Doktora. Zastępca kierownika artystycznego i dyrygent Zespołu Pieśni i Tańca "ŚLĄSK", założyciel i szef artystyczny zespołów OCTAVA ensemble oraz Collegium Copernicus. Laureat I nagrody, oraz nagrody Prezesa Polskiego Radia na XII Ogólnopolskim Konkursie Dyrygentów Chóralnych w Poznaniu oraz II nagrody w The International Choral Conducting Competition "Towards Polyphony" pokonując przedstawicieli z 6 krajów i 12 miast całej Europy. Otrzymał także nagrodę dla najlepszego dyrygenta podczas 39' Ogólnopolskiego Turnieju Chórów "Legnica Cantat". Jako dyrygent współpracuje m. in. z Operą Krakowską, Operą Wrocławską, Capella Cracoviensis, Zespołem Pieśni i Tańca "ŚLĄSK", Chórem Polskiego Radia, Chórem i Orkiestrą Akademii Muzycznej w Krakowie. Uczestniczył w wielu koncertach, konkursach i najważniejszych festiwalach muzycznych w kraju i za granicą. Dwukrotnie otrzymał Stypendium Ministra Kultury za wybitne osiągnięcia artystyczne oraz osiągnięcia w nauce, a także Stypendium Naukowe Miasta Krakowa oraz Stypendium Twórcze Miasta Krakowa (dziedzina: zarządzanie kulturą). Uczestniczył także w licznych kursach i wykładach dla dyrygentów. Równoległe prowadzi działalność pedagogiczną.

Adistinguished graduate from the Academy of Music in Krakow, Poland. Deputy artistic director and conductor of the Song and Dance Ensemble "ŚLĄSK", founder and artistic director of the OCTAVA ensemble and Collegium Copernicus. As a conductor, he has cooperated with the Opera in Krakow, Opera in Wrocław, the Polish Radio Choir, the Academy of Music in Kraków Choir and Orchestra, and many others. He was granted the Ministry of Culture scholarship twice in his career. He was awarded prizes at numerous prestigious conducting competitions. As a soloist, he has performed both within the country and abroad. He also works as a conducting teacher.

指揮者のジークムントさんは、笑顔がない繊細な音楽家だと思っていましたが、公演前に甘そうなケーキを注文しているのを見て、ちょっと微笑ましかったです。演奏の後はこんな笑顔になるんだー。

シロンスクの歌手、ドロタさんもこんなに笑顔。

プロとしての責任とプライドでいつも厳しい顔になってしまっていたんですね。



オーケストラメンバー

ORKESTRA OPERY KRAKOWSKIEJ POD DYREKcją ZYGMUNTA MAGIERY
W SKŁADZIE:

I Skrzypce

1. Białostocka Swietłana
2. Łobaczewska Kuźnia Barbara
3. Laszkiewicz Igor
4. Litwa Ewa
5. Kamińska Magdalena
6. Gromada Dorota

II skrzypce

7. Ibek Milewska
8. Kuźnia Tomasz
9. Sznicar Angela
10. Welanyk Ewa
11. Omiołek Leszek
12. Aleksandra Guja

Altówki

13. Michailenko Aleksandra
14. Augustyn Piotr
15. Drak Maria
16. Karpała Jadwiga

Wiolonczele

17. Krzyżanowski Dobrosław
18. Pacanek Leszek
19. Drobnik Jakóbk Barbara

Kontrabasy

20. Bednarczyk Marek
21. Porosło Marek

Perkusja

22. Kotarba Marcin
23. Seweryn Żaneta

Flety

24. Pańczyk Janusz
25. Klimczak Karolina

Oboje

26. Pozdeev Leonid
27. Drak Mirosław

Klarnety

28. Krowicki Jerzy
29. Olko Stanisław

Fagoty

30. Babiński Arkadiusz
31. Krzyszkowski Patryk

Trąbki

32. Drescher Marek
33. Konstanty Szymon

Waltornie

34. Rakoczy Ryszard
35. Jaworski Jarosław

Puzony

36. Bała Arkadiusz
37. Piznal Bogdan



シロンスク舞踊団の皆様
マウシロンスクの皆様
オペラクラフフのオーケストラの皆様
共演ありがとうございました！



シロンスク舞踊団
マウイシロンスク
シロンスクピアニスト
のみなさん



オペラクラフのクロチェックさんは、とても優しく、メールのやり取りは、忙しかったのか、滞ったりして最後まで大変でした。

(彼の夏休み中に代理で仕事してくれたマゴサタさんという女性は、チャージングでオペラ公演のアドバイスも素晴らしかった。)

それから、通訳も翻訳もガイドもしてくださった、マグダレーナ。彼女がポーランド語で相手と交渉してくれているときはとても頼もしかった。後で、どんな話したの？と聞くと、東京オペラ協会やオペラの仲間のために、宣伝したり、融通をきかせてもらったり、反論したり、本音を聞いたりしてくれました。一緒に来てくれてありがとう！



オシフィエンチムのマリウス神父

英語は苦手だからと、ポケットのような翻訳機を手に入れて会話をしてくれたり、自室でフルーツジュースを作ってくれたり、自らマイカーで送迎してくれたりとても優しくかったです。公演後のパーティはマリウス神父からのプレゼントでした。



オシフィエンチムのマルティン神父

本番の頃には、他の教会へ移動されていたらしいやいませんでした。英語や筆談で、一生懸命打ち合わせをしてくださいました。



ドロタさん

オシフィエンチムでのお世話は全て彼女がしてくださいました。ときゆく者の衣装として借りた修道服を、二エポカラノフに返却することまで請け負ってくださりとても優しくかったです。

